熊崎城跡発掘調査概報

1 9 8 1

広島県教育委員会

熊崎城跡発掘調査概報

Ⅰ　は　じ　め　に

昭和54年11月５日，広島県広島農林事務所より広島県教育委員会に対し，同所が佐伯郡吉和村熊崎で計画中の治山事業渓間工事によって作業道工事の一部が熊崎城跡の遺跡内にかかるため，その取り扱いについて協議書が提出された。このため県教育委員会ではこの内容を検討した結果，現状保存は困難であるところから，事前に発掘調査を実施することとし，昭和55年６月９日から21日までと同年９月８日から20日までの計23日間発掘調査を行い，記録保存の措置をとった。

調査にあたっては地権者をはじめ関係者各位から御協力を頂いた。ここに厚くお礼を申し上げる次第である。

なお，本書の執筆・編集は広島県教育委員会事務局管理部文化課指導主事桑田俊明があたった。

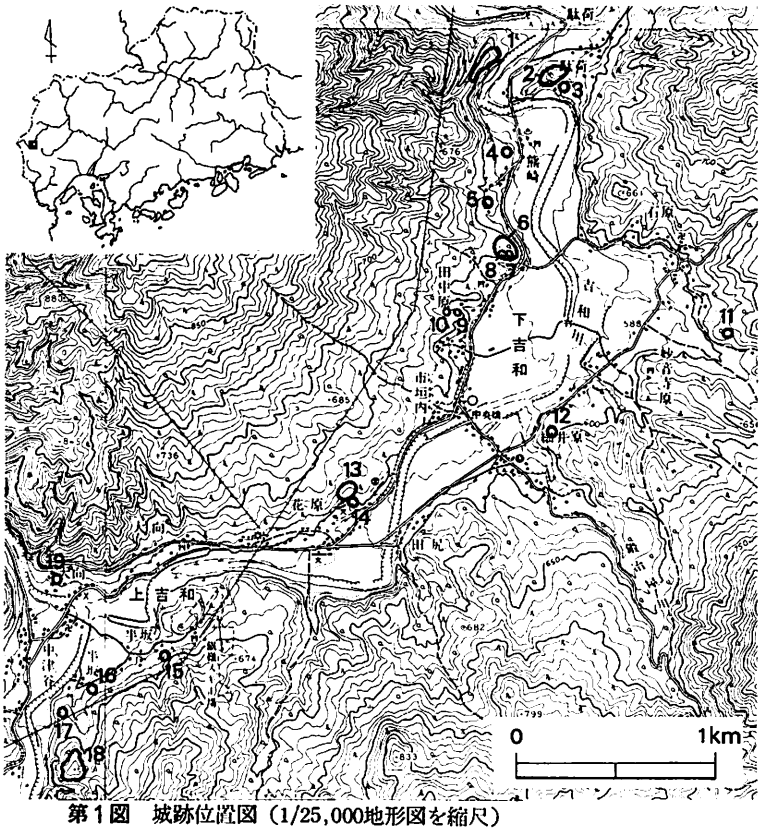
熊崎城跡遠景（南より）

Ⅱ　位置と歴史的環境

熊崎城跡は広島県佐伯郡吉和村大字熊崎に所在する山城で，下吉和の盆地を南に眺む北端の要地に位置する。城の南・東側は蛇行する吉和川により自然の堀をなしており，北側は深い谷が湾入している。

ところで，熊崎城の周辺にはいくつかの山城が知られており，東側対岸の独立丘陵には階段状に４郭を配置した駄荷城がある。また『芸藩通志』によると熊崎城の南約900ｍには平城跡があるが，現在土塁・堀などは認められない。低地を眺む女鹿平山南麓には花原城跡がある。これは『芸藩通志』には城とされているが，安達与三左衛門の屋敷跡といわれており，20×40ｍの平坦部がみられる。半坂尾城は上吉和一帯を見おろす丘陵上に位置し，約25×30ｍの本丸のほかいくつかの小郭・腰郭・堀切を設けている。城主は『芸藩通志』によると，出雲の尼子氏と関係のある三浦兵部であったといわれる。

一方，これらの山城周辺にはいくつかの古墓が付随してみられる。熊崎古墓は熊崎城跡の南方約600ｍにあり，５×４ｍの範囲に人頭大の山石を積み上げた積石塚が２～３基確認されている。同様に駄荷城の東南麓には五輪塔が２基，花原城跡の南には積石塚が数ケ所にわたって認められる。また，半坂尾城の北麓には込山古墓[1]をはじめ３群の古墓がある。このように，小



1　熊崎城跡
2　駄荷城跡
3　駄荷古墓
4　熊崎遺跡
5　熊崎古墓
6　平城跡
7　田中原第１号古墳
8　〃　第２号古墳
9　〃　第３号古墳
10　〃　第４号古墳
11　石原遺跡
12　妙音寺原遺跡
13　花原城跡
14　花原古墓
15　込山古墓
16　天堂古墓
17　半坂遺跡
18　半坂尾城跡
19　大向遺跡

この地図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の25,000分の１地形図を複製したものである。
（承認番号）昭56中複第12号

第１図　城跡位置図（1/25,000地形図を縮尺）

規模ながら点在するこれらの古墓は各々山城と関係をもつものであろうと思われる。

ところで，吉和地区の古墓の中で卓越した規模をもつものの一つに妙音寺原遺跡がある。この遺跡は，昭和54年に発掘調査が行われ[(2)]，二段積大形古墓を含む積石塚17基，土坑墓14基が検出された。時期は室町時代を中心としたころで，吉和地区における中世から近世初頭の動静をみる上でも貴重な遺跡となった。

注

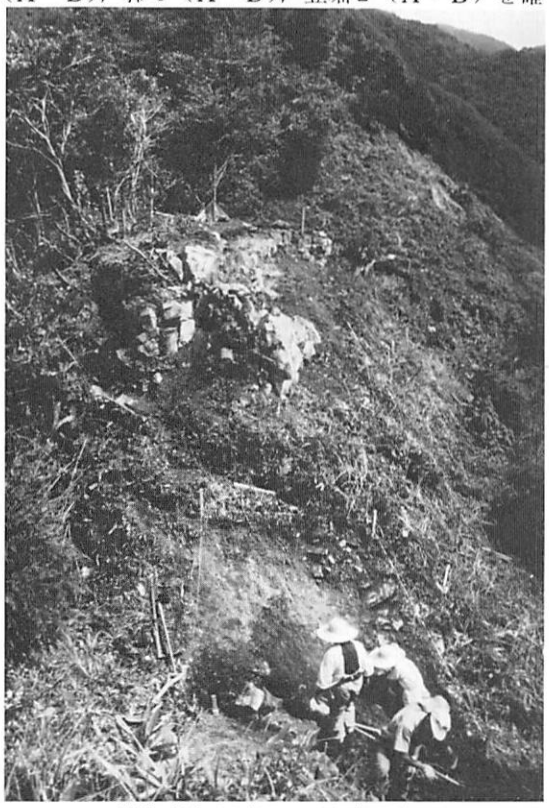
1) 中国自動車道建設に伴う発掘調査で昭和54年４月から11月にかけて広島県教育委員会と(財)広島県埋蔵文化財調査センターが調査を行った。

2) 同　上

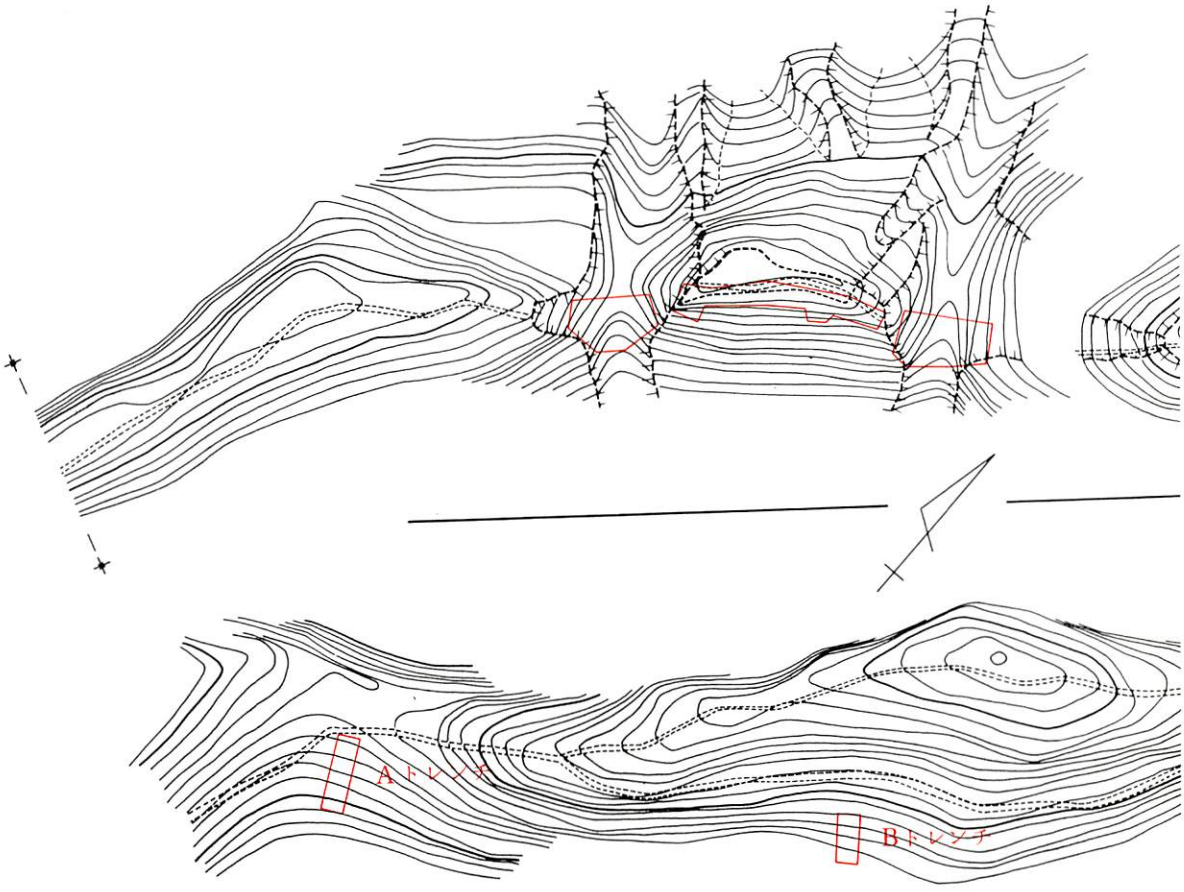
参考文献　西本省三・葛原克人編『日本城郭大系13　広島・岡山』(新人物往来社　1980年)

Ⅲ　調査の経過

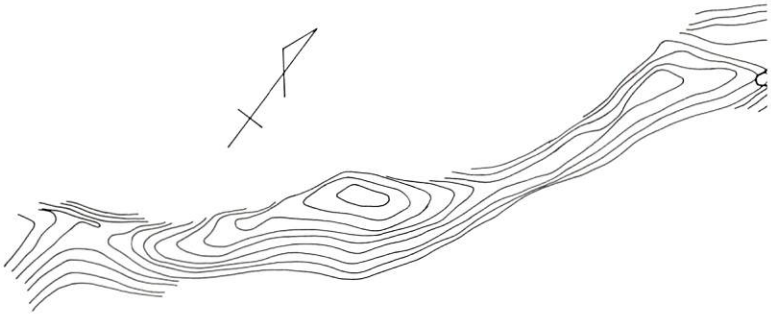
６月の調査では，工事予定地内に幅1.5m，長さ２～５mのトレンチを３本あけ，それぞれＡ～Ｃトレンチと称した（第２図)。特にＡトレンチは空堀の可能性も考えられたが，調査の結果，30～50cmで自然層に達し自然地形のままであることが確実になった。引き続き９月にはその東方の調査を行ったが，その結果空堀２（Ａ・Ｂ)，郭４（Ａ～Ｄ)，竪堀２（Ａ・Ｂ）を確認した。調査は，特に急傾斜な郭Ｃ南側面を除く５地点について行ったが，全体に急峻な痩尾根で作業に危険が伴うため，必要最少限の発掘にとどめた。郭Ｂの調査部分は一応工事予定外になるが，法面削平のため若干破壊を受ける危険もあるためトレンチ調査を行った。なお，調査に際しては，同所一帯が松の植林地となっているため排土の扱いについては細心の注意を払った。



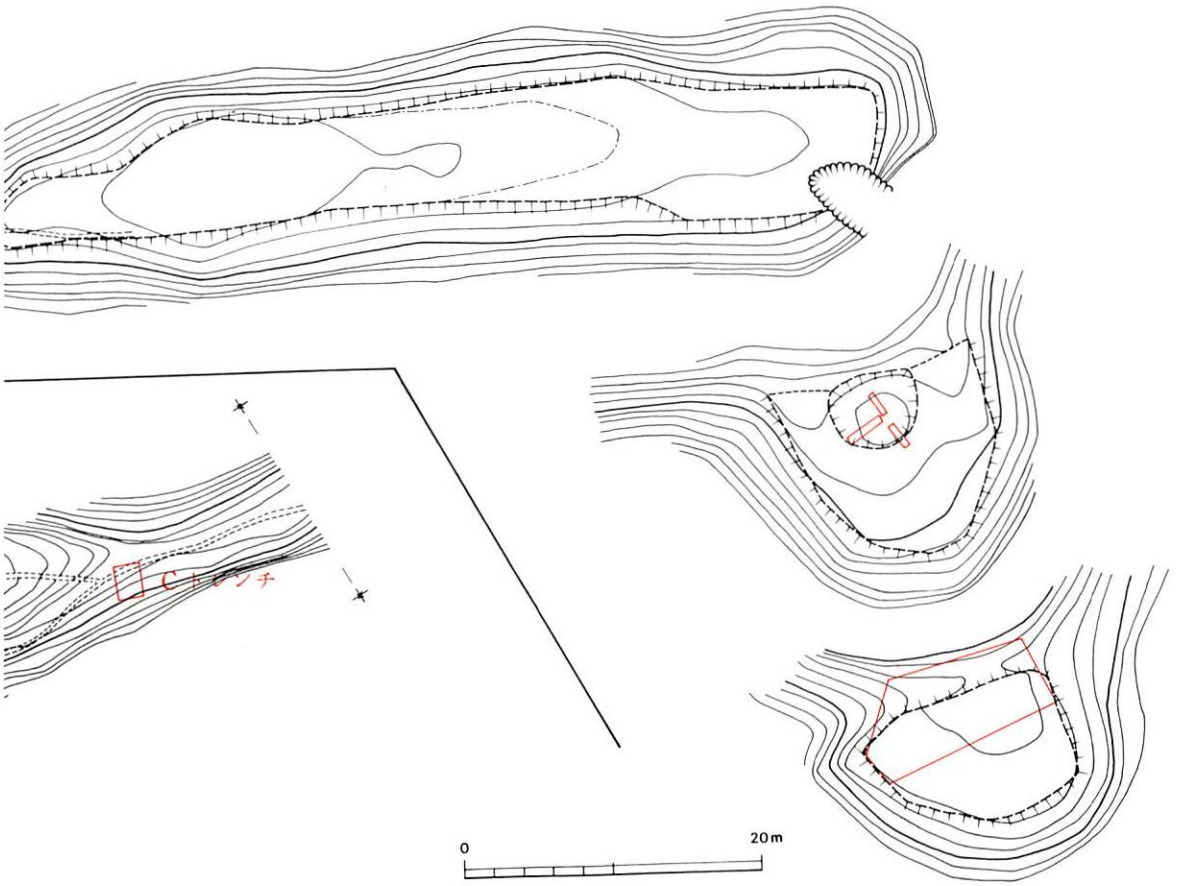
城跡近景（空堀Ｂより東方を眺む）

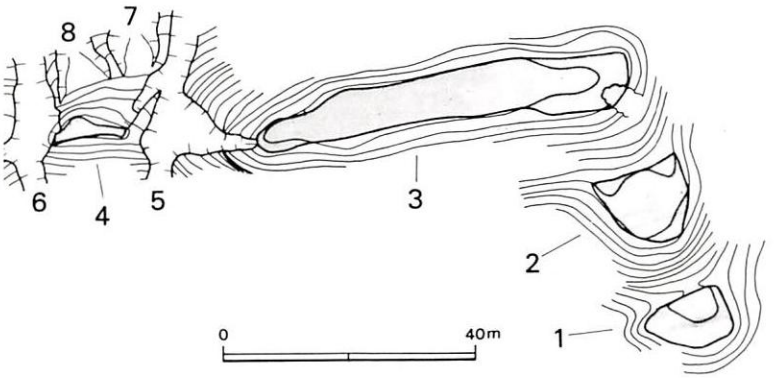


第2図 城跡地形測量図（1/500）（等高線は50cm間隔）



第3図 城跡全図（1/1200）





1　郭　A
2　郭　B
3　郭　C
4　郭　D
5　空堀A
6　空堀B
7　竪堀A
8　竪堀B

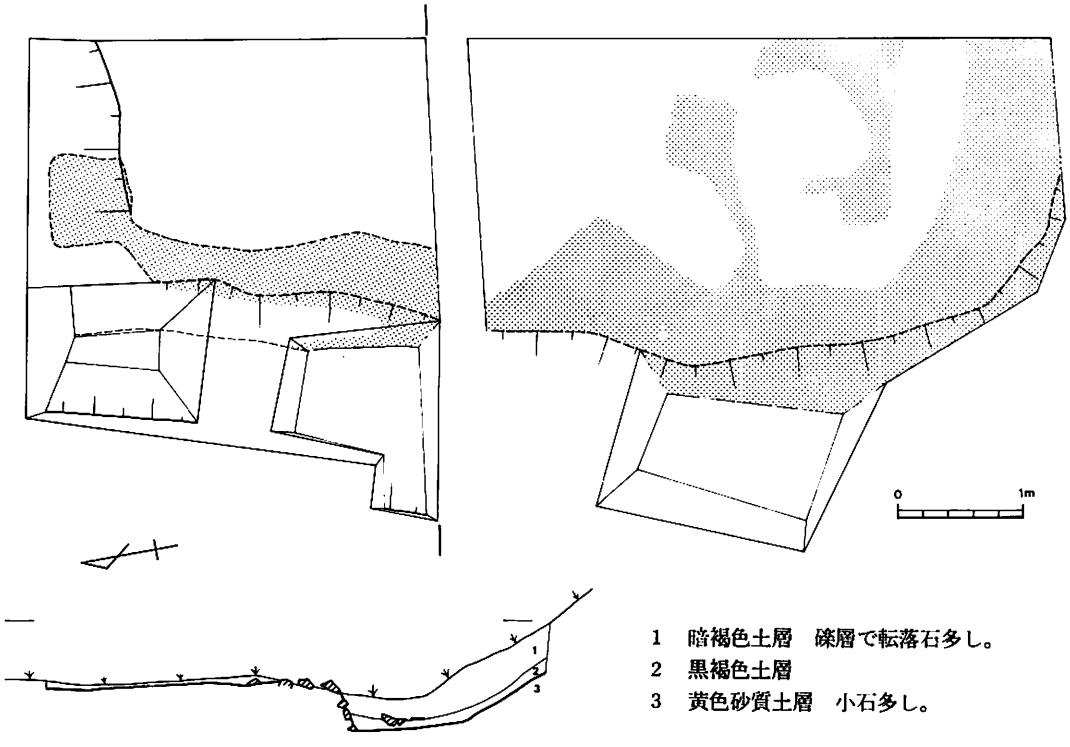
Ⅳ 遺　　構

(1) 郭A（第２～４図）

城郭先端部に位置し，現地形で東西11ｍ，南北12ｍを測る。川に面する南側は急傾斜で岩盤が露呈している。それに対し北側はやや緩斜面である。西側山寄りでは南北両側の下方斜面にわたって幅１～1.5ｍ，深さ約40cmの堀がみられ，暗褐色土・黒褐色土とともに多量の落石が流入していた。この堀は人為的なものと思われるが，東法面は自然の岩肌であり，簡単な掘削による造成である。郭の平坦部は表土層直下の黄褐色土層が遺構面と思われるが，柱穴等は一切検出されなかった。また縁辺部分は岩盤である。

(2) 郭B（第２・３・５図）

郭の規模は東西11ｍ，南北13ｍである。当初南西部分にいびつな三角形の落ち込みがみられ井戸かと推定された。そこで幅50cmのトレンチを３本あけたが予想に反して落ち込みの形状は幅1.2ｍ前後，推定長４～５ｍ，深さ0.9ｍの細長い土坑となった。さらにこの周辺は擂鉢状の緩斜面となっている。現地形での傾斜変換線はこれと同一のものと考えられる。

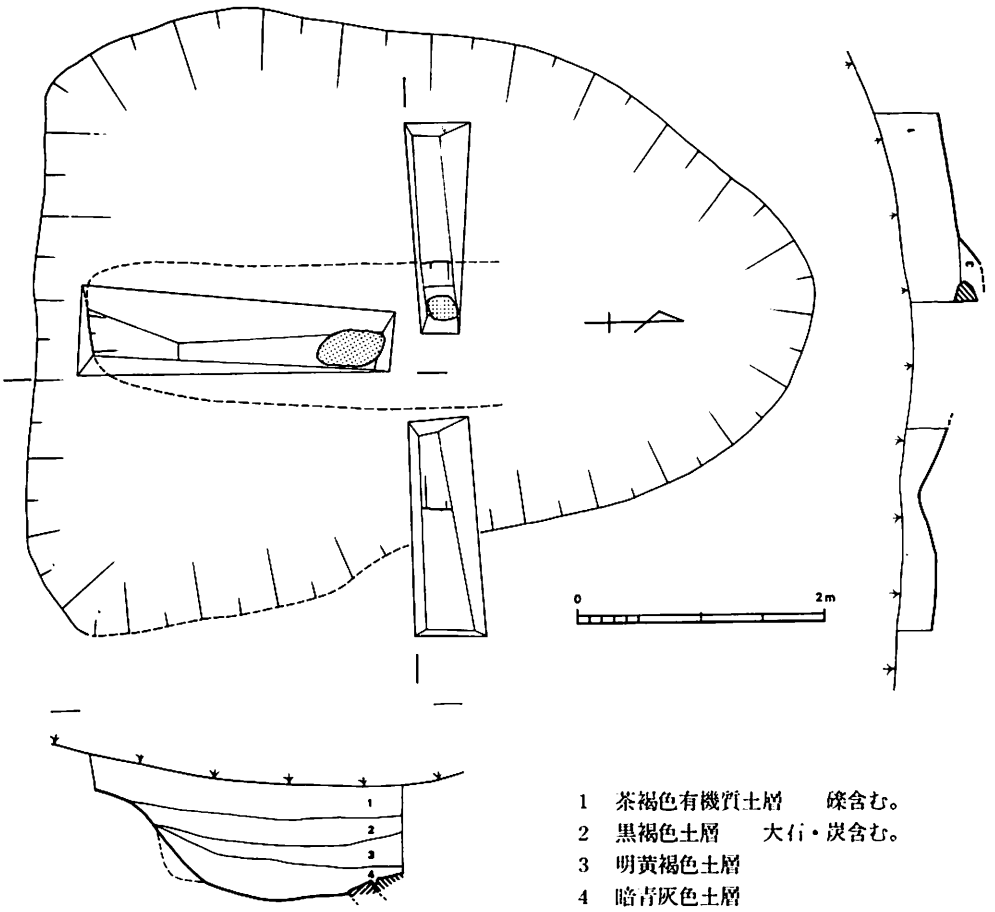


1　暗褐色土層　礫層で転落石多し。
2　黒褐色土層
3　黄色砂質土層　小石多し。

第４図　郭A平面及び断面図（1/60）アミ目は岩盤

(3) 空堀・郭D（第２・３図）

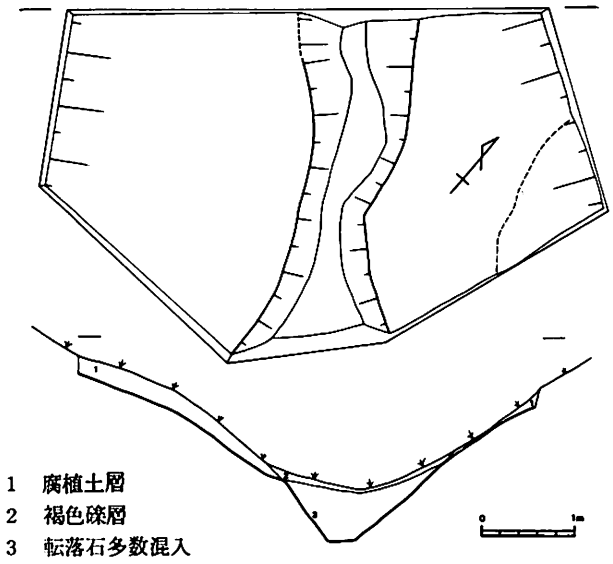
空堀A・Bは，郭Dをはさんで設けられていたが，いずれも表土下20～60cmで地山もしくは岩盤に達し，郭Dとの比高差は約４ｍである。堀は南北の急斜面にのび，幅はAで４ｍ，Bで４～７ｍを測る。堀の傾斜は現地表面にほぼ沿っており，Aの西側が約30°，その他は45～50°である。ただ，底部付近はやや傾斜が変って深くなり，上幅１ｍ前後の小溝となっている。これらの空堀によって区画された郭Dは，全面岩盤が露呈し，自然地形をそのまま利用したものである。今回では発掘を行わなかったが，郭Dの北側面には幅６～８ｍの竪堀が２本設けられており，上記の郭・空堀とあわせて搦手の防備をより堅固なものとしている。



第５図 郭B平面及び断面図（1/60）

(4) そ の 他

空堀Aの西方に山城の範囲確定のためトレンチA～Cを設定したが，いずれも10～60cm程度で地山に達し，何ら人為的な痕跡は認められなかった。したがって，城郭の西限は空堀Bであることが明かとなった。ただ，空堀Bの北西に小さな平坦部が認められ，城郭の一部かとも思われたが，防御上の機能および地形からみて自然地形とするのが妥当であろう。



第6図 空堀B平面及び断面図（1/80）

V ま と め

熊崎城は，駄荷城とともに吉和盆地の北端に位置し，要害の地を占める山城である。『芸藩通志』などによると城主はいずれも河野蔵人といわれ，相互に何らかの関連をもつ城である。

この山城は，標高620mの細い尾根上に階段状に築かれ，本丸に相当する郭Cを中心に前方に2段の郭，背後に2本の深い堀切をもち，そして搦手北側面には2本の竪堀を要して南側面の急峻な地形とあわせて堅固な構造となっている。しかし，全体に細尾根であるため，各々の郭は小規模である。特に本丸にあたる郭Cは幅が4～8mしかなくその上岩盤が表土直下を全面覆っているため，居城としての機能は果せないものである。これらのことから，同城は軍事戦略的な意図のもとに築かれたものと思われる。

なお，調査区からは一切遺物が出土しておらず，遺物による時期決定はできなかった。

昭和56年(1981) 3月31日

熊崎城跡発掘調査概報

編集・発行　広島県教育委員会

印　　刷　株式会社 柳盛社印刷所